

# 人は如何に生きるべきか（その5） （空気を読む）

財団法人 電子科学研究所 辻本 忠\*

## 1. はじめに

女性のおしゃべりタレントが「空気を読めない男のおしゃべりは大嫌い」とテレビで話しているのを聞いた。テレビの司会者やコマーシャルでも「空気を読む」という言葉をよく耳にする。特にお笑い芸人などは、その場の空気を読むのに神経を使っているという。2007年の参議院選で敗北した安部改造内閣をKY内閣と評された。今の福田内閣はどうであろうか。

あるビジネス雑誌に「空気を読む技術」という特集号が昨年末に発行された。また、「空気を読む」に関連した書籍が多く出版されている。2008年の2～3月に発行された書籍だけでも下記のようなものがある。

- (1). 「なぜ、あの人は空気がよめるのか？」  
ゴマ文庫 秋庭道博著者 2008年2月10日  
初版第一号発行
- (2). 「KY式日本語」（ローマ字略語がなぜ流行るのか）  
大修館書店 北原保雄編者 2008年2月10日  
第1刷、2008年2月20日第3刷
- (3). 「空気を読む力」（急場を凌ぐもコミュニケーションの極意）  
アスキー新書 田中大祐著者 2008年3月  
25日

このなかの(2)「KY式日本語」の初版1刷りが2008年2月10日で、10日後の2008年2月20日には3刷りが発行されている。1刷で何部刷られたのか

からないが、10日の間に3回増刷りされている。

KYとは「空気を読めないやつ」のことで、「空気を読めないやつ」をローマ字で表した時の、KuukiのKとYomenaiのYで表した略語である。KYという言葉は特に10代～20代の若い女性達の間で爆発的に流行している。若い女性が用いるKYとは「グループと行動を共にしないやつ」や「人と違う事をするやつ」の事である。そして、KYという用語は2007年の流行語大賞にノミネートされた。ローマ字書きの最初の区や語より作る略語はKYだけではなく最近はいろいろな略語が氾濫している。

今流行の略語の一例を下記に示す。

- (1) KY : 空気を読めないやつ
- (2) TKY : とっても空気を読めないやつ
- (3) MMK : もててもててこまっちゃう
- (4) MM : マジむかつく
- (5) NW : ノリ悪い
- (6) KZ : 絡みづらい
- (7) AY : 頭弱い
- (8) JK : 女子高校生
- (9) YM : ヤル気満々
- (10) KB : 空気ぶち壊し

これは若い女性が携帯でメール交信する時に略語や絵文字を用いることが多い。そのため、ローマ字の頭文字を使った略語が流行ったものと思う。

## 2. 空気を読む

「空気を読む」ということは、その場の雰囲気を知ること、あるいは察するということで、昔よ

\* 〒541-0057 大阪市中央区北久宝寺町2-3-6

り用いられてきた言葉である。その場の雰囲気を感じるといふより、その場の空気を読むといったほうが、その場の状況をよく表している。この言葉は会議の状況を表すときにも用いられている。

「あの時の会議は重苦しい空気であった。」「会議の空気は乱れていた。」「その時の空気に逆らう事は出来なかった」などである。戦後はこのような状況をムードと言った時もあったが、最近では空気という言葉が用いられている。

はじめに安部改造内閣をKY内閣と述べたが、小泉元首相は新しい風を吹きつけて空気を変えた人かも知れない。空気に水を差す人もいる。場の空気は強固で絶対的な支配力を持っている。しかし、風を吹き付ける事によって空気が入れ変わり、水を差すことによりその場の空気が反転し、改革及び革命につながることもある。

空気を読む事は生きていく上で必要な事である。人間は生きていくために群れを作る。その群れが大きくなったものが、集落であり、国である。群れをつくれれば群れの中の共通の了解事項に従わなければならない。そのため、順位制社会が出来上がり、争いが始まる。了解事項とは集落では掟であり、国であれば法律である。掟を破れば村八分になり、法律に違反すれば罰せられる。

群れの中の共通の了解事項を守るために、人間の脳は環境条件に適合するように変化していく、これを可塑性という。可塑性とは粘土のようなもので、どのような型にでも変えることが出来る。脳のプログラムは場の空気に適合するように変わっていく。場の空気は非常に強固で絶対的な支配力を持っている。そして、直感的で感覚的である。これは右脳で考えるからである。これに抵抗するのは極端な時には社会的に葬られる場合もある。しかし、左脳で考える論理的な判断基準は脳梁を経て右脳に移り、場の空気を変えていく。

若者達が言う「空気を読む」は人間関係のときに用いられているが、上述のように会議のようなグループ及び社会、政治、経済のような広域に亘って用いられる場合もある。戦前の空気と戦後の空気は全然違う。最近では特に空気の変わり方が激

しい。昔は10年ひと昔と言った。最近では、1年ひと昔かも知れない。今日の「空気」と明日の「空気」は違うかも知れない。そのため、今日の「空気」に従って行動すれば正しい行動であっても、明日の「空気」は今日の空気と違うかも知れない。そのため、今日の行動は、明日は正しくないかも知れない。最近の社会における「空気」はマスメディアによって作られることが多い。マスメディアは極端な事を大きく報道する傾向がある。マスメディアによってもたらされる情報は高度に発達した現在社会の中では非常な勢いで飛び交い、その情報量は膨大である。そして、その変化も急激である。われわれはこのように膨大な情報が、短期間に、非常な勢いで入り乱れる複雑な社会の中で生活している。そのため、われわれ周辺の「空気」も非常な勢いで変化している。そこで、脳の可塑性は社会に順応しきれなくなり、不安や不快が発生し、ストレスがたまりうつ病になる。あげくの果てには日頃おとなしい子供が親を殺し、親が子供を殺す、全く関係の無い人でも衝動的に人を殺す、また自殺するという現状が毎日のように社会面を賑わせている。これらの人を世間では二重人格者としてあつかっている。われわれは、変化の激しい空気の中で生活している。そのため、脳の可塑性は空気に順応出来なくなり、これからのように生きていけばよいのか見通しがつきにくくなる。しかし、人間には目標が無ければ生きていけない。そこで、最後のよりどころとして人は「神」を求めようになる。

### 3. 戦前・戦後の日本

終戦の時（1945）、大阪に上陸した進駐軍（アメリカ兵）はトラックに乗り、列を作って京都に向かった。戦争中、われわれは「米英鬼畜」と教えられた。アメリカ兵が上陸してくれば、男は玉を抜かれ、若い女は辱めを受ける、食料は没収されるという考えの空気が定着していた。私の家は大阪市内で守口に近い国道1号線に沿ったところにあった。父親は戦地で、子供3人を抱えて「銃後の護」をしていた母親はアメリカ兵が上陸してきた

時に子供3人を防空壕の中に入れ、食料は土の中にうめた。当時国民学校（現在の小学校）5年生の私は母親の言う事をきかないで、防空壕より飛び出し、戸の隙間よりアメリカ兵を監視していた。その時のアメリカ兵の顔は真っ赤で、手を振りかざし、トラックの上でわめいていた。その時、つくづくアメリカ人は鬼みたいだなと思った。今から考えると日本に上陸してきたアメリカ兵は非常に緊張し、それをほぐすためにウイスキーを飲み、わめき散らしていたのかもしれない。勿論兵士であるので、日焼けをしていても当然である。しかし、アメリカ人やイギリス人を鬼のように恐ろしく、日本人に悪い事をする人間だと思っていた。そこで、私は木刀を持ち母親と弟と妹を守らなければならないという思いで戸の隙間よりアメリカ兵を監視していた。本気で少年剣士のような気持ちであったと思う。アメリカ兵が家に進入してくれば、一家を守るために木刀をかざしたかも知れない。今から考えると木刀を持った国民学校5年生が拳銃を持った大男のアメリカ兵に勝てるわけがないが、その時は一家を守る事だけしか頭になかったと思う。それも当時の空気のなせるものである。

ところが、しばらくすると、アメリカ兵は私の家の近くに装甲車を横付けして検問所を作った。そして、子供達にチューインガムやチョコレートなどを投げられるようになった。子供達はアメリカ兵の周りを取り巻き「ハロー」といい、ばら撒いたくれたチューインガムやチョコレートを奪いあったものである。私もその時の仲間であった。その時の私は非常に無邪気で、かつての少年剣士は何処かへいってしまっていた。アメリカ兵は胸をはり、拳銃を肩に掛けて、威風堂々とそそり立っていた。そして、その足元で子供達がチューインガムやチョコレートの奪い合うのを見降ろしていた。大人達はアメリカ兵が少しだけ吸って投げ捨てるタバコを奪い合って拾っていた（このような人達のことをもくひらいと言う）。しかし、戦後の空気はアメリカ兵は悪いことをする人より、よい人だというふうに変ってしまった。

太平洋戦争末期（1945）アメリカ兵は沖縄に上陸し、日本軍との間で最大規模の地上戦が行われた。この場合、民間人を巻き込んだ地上戦となった。当時の考え方は国のために死ぬのは尊いことで、アメリカ兵に捕まれば屈辱なめにあい、醜く殺されると教え込まれていた。そのため、アメリカ兵が上陸した時には自決せよとあらかじめ訓示・命令が出て、手榴弾などが配布されていたから「集団自決」が起きても決しておかしくなかったと思われる。これも、その時の空気には勝てなかったと思われる。

戦争中、私の家の近くに焼夷弾が降り注ぎ次から次へと家は燃えていった。私の家は「わらぶき」であったので近所の人達は出来るだけ早く取り壊して欲しいという空気であった。そこで、隣組の組長が「わらぶき」の家は取り壊して欲しい、と言ってきた。当時の空気としては当然であったかも知れない。しかし、家がとり壊されると、父は戦地で、一家を支えている母親は子供3人を抱えて路頭に迷う事になる。そこで、母親は誰がそのような事を言っているのですかと反論した。そして、区役所に出掛けて「わらぶき」の家は取り壊さなければならないのですかと聞きに言った。区役所の人はそんな指示は出ていないと言ったので、組長にそのような指示は出ていないと直談判した。組長は母の剣幕に負けてしまい、それからはなにも言わなくなった。「母は強し」。母親は「空気」に負けなかった人かも知れない。戦後になっても「わらぶき」の家は健在であった。しかし、都会の中の「わらぶき」の家であるので、家の前を通る子供達に田舎の家だとよく言われたものである。勿論、その家は今はない。葺き替えが大変で、財力が無ければ維持出来ない。しかし、「わらぶき」の家は夏は涼しく、冬は暖かく住みよい家である。

#### 4. 船場吉兆廃業

高級料亭船場吉兆は19年10月に消費期限・賞味期限切れの商品の販売及び九州産牛肉を但馬牛と偽って販売した事が発覚し、11月より営業を自粛していたが、2月には「二度と同じ失敗を繰り返

えさないよう身を挺して頑張ります」と言って営業を再開した。営業再開当時は昼は20人のほぼ満席、夜は6つの座敷の内4つに予約が入っているという盛況ぶりであったという。ところが客の残した刺身やアユの塩焼きを別の客に使い回しをしていることが発覚し、急激に客足が遠のき5月28日廃業に到った。

創業300年の歴史を持つ老舗和菓子屋赤福の「赤福餅」は伊勢神宮参拝の土産物として知られている。さらに、この「赤福餅」は大阪、名古屋の売店、百貨店等でも販売され、百貨店等で開催される物産展でも大変な人気があった。この、「赤福餅」に賞味期限及び製造日、原材料表示偽装が発覚した。農水省が平成19年9月19日に日本農林規格法に違反として立ち入り調査に入った。三重県は10月19日に無期限の営業禁止処分を行ったが、平成20年1月30日に営業停止処分を解除した。販売が再開された「赤福餅」に対する人気は今まで以上で、よく売れているようである。

土産物の単品売り上げで赤福に次いで全国2位（2003年1月4日）の北海道士産物として人気の高い「白い恋人」がこれも賞味期限改ざんで、平成19年8月16日に札幌市保健所の立ち入り検査を受け、販売停止になった。その後、3か月ぶりに販売された「白い恋人」は軒並み売り切れが続出するくらいよく売れているようである。

食品の原材料偽装表示は我々の口にするものであるから非常に心配である。食品の安全性に対する市場調査では73%が「気にする」と答えている。偽装表示に対して世間の空気は非常に厳しい。これは感覚的な問題で、右脳で直感的に考えているからである。ところがしばらくすると左脳の論理プログラムが働き、賞味期限は少しくらい延びていても味には影響ないし、死ぬような事もない。また、一度世間に叩かれるともう悪い事はしないだろうという空気にかわり、かえって宣伝効果が大きくなって、船場吉兆は繁盛し、「赤福」や「白い恋人」はよく売れるようになったと思う。

ところが、「船場吉兆」は客の残したものを使い回していたことが発覚し、左脳の許容値を超え、

世間の空気は「船場吉兆」を許さなくなった。

これまで、食品問題で世間を騒がせた事件がいくつもある。代表的な例を挙げてみると①森永ヒ素ミルク事件（昭和30年）、②カネミ油症事件（昭和43年）、③病原性大腸菌O-157事件（平成2年）、④雪印集団食中毒事件（平成12年）、⑤狂牛病事件（平成13年）、⑥雪印牛肉偽装事件（平成14年）などである。これらは当時、社会問題となり世間の空気を騒がせたが、今では忘れられている。空気は年月と共に風化していくものである。



## 5. 脳のけもの道

人間の脳は可塑性で空気に適合するようにならっていく。しかし、最近の「空気」はマスメディアの影響を大きく受ける。これに対応して脳はどのような働きをするのであろうか。脳のメカニズムについて考えてみる事にする。

コンピュータはトランジスタなどの素子が結合し集積回路を作っているが、人間の脳はコンピュータの素子にあたるものが神経細胞で神経細胞と神経細胞が結合して集積回路を作っている。神経細胞と神経細胞の結合は、神経細胞より伸びた軸索が別の神経細胞の樹状突起と接合し情報伝達の担い手となる。軸索の先端部は沢山枝分かれしている。それが神経細胞よりたくさん出ている樹状突起と接合する。この接合部をシナプスという。一つの神経細胞には100個から10万個シナプスが存在するといわれている。このようにして神経細胞が他の神経細胞とつながりをもって回路網が出

来あがる。回路網はいくつか繋がりを持って集積回路を作り上げる。一個の神経細胞が1万個の神経細胞に情報を伝える事が出来る。脳には2,000億個の神経細胞が存在するといわれている。シナプスは大きく分けてプラスとマイナスの2種類に大別される。プラスのシナプスの場合は興奮性のシナプスで次の神経細胞を興奮させ、新しいし信号を起こし、次々と信号の伝達が行われる。マイナスのシナプス信号はその神経細胞で止まってしまう、次の神経細胞には伝えられない。

シナプスは同じ事を繰り返すと強化され、あまり使わないと萎縮したり、退化したりする。外部環境の変化によって新しいシナプスが接合し、使われなくなった接合部は消えていく。一度消えた接合部も外部環境の変化によってふたたび結合することもおこる。ひらめきは新しいシナプスの結合である。脳の中の幻想的な回路網は通常は行動を起こさない。ところが現在社会のように回路網があまりにも複雑に絡み合うと幻想的な回路網が行動を起こすようになる。これが多重人格者である。

山中で一匹のけものが通ると、踏み跡ができて通りやすくなる。通りやすくなったところを絶えず「けもの」が通ると道が自然に出来上がる。このようなものを「けもの」道という。しかし、せっかく出来た「けもの」道もけもの達が別の道を通るようになると草木が茂り、道がなくなってしまう。身近な一例として、トンネルの開通により峠越えの道が廃道になったところが沢山ある。脳の中の回路網は「けもの」道のようなものである。

「けもの」道は絶えず環境によって変わっていく。変な道が出来ることもある。そして同じところを、ぐるぐると回ってしまい前には進まないこともある。人はよく「歳と共に脳の細胞（神経細胞）が壊れてもの忘れが激しくなってきた」と言われる。しかし、もの忘れが激しくなるのは神経細胞の破壊ではなく、神経細胞の結合回路網が消えていくためである。神経細胞の数は歳とともに減少していく。しかし、生まれた時には140億個もあり、そのほとんどが使われていないので神経細胞の数が

少々減っても心配する必要はない。しかし、神経細胞と神経細胞を結合する回路網は環境からの刺激に応じて年とともに構築され、16歳頃まで構築が続く。論理回路の左脳は20歳前後がピークで、後は下り坂になる。感性や感情及びイメージを司る右脳は20歳を過ぎてからも成長を続けるが50歳ぐらいをピークにして萎縮や退化が始まる。しかし、日頃より脳を使っていれば萎縮や退化が少なくなり老化防止につながる。

そうして空気を読む力が活性化される。

以上

(ESI-NEWS Vol.26 No.3 2008 より転載)



□